(19)日本国特許庁(JP)　(12)特　許　公　報(B2)　(11)特許番号
特許第3883217号
(P3883217)
(45)発行日　平成19年2月21日(2007.2.21)　(24)登録日　平成18年11月24日(2006.11.24)

(51)Int.Cl.　F I
B65D 83/08 (2006.01)　B65D 83/08 C

請求項の数 1 (全 7 頁)

(21)出願番号　特願平6-232673
(22)出願日　平成6年9月28日(1994.9.28)
(65)公開番号　特開平8-91455
(43)公開日　平成8年4月9日(1996.4.9)
審査請求日　平成12年5月25日(2000.5.25)
審判番号　不服2003-7735(P2003-7735/J1)
審判請求日　平成15年5月6日(2003.5.6)

(73)特許権者　390029148
大王製紙株式会社
愛媛県四国中央市三島紙屋町２番６０号
(74)代理人　100082647
弁理士　永井　義久
(72)発明者　筒井　丈二
愛媛県伊予三島市紙屋町５番１号　大王製紙株式会社内

合議体
審判長　寺本　光生
審判官　中西　一友
審判官　豊永　茂弘

最終頁に続く

(54)【発明の名称】ティシュペーパー収納箱

(57)【特許請求の範囲】
【請求項１】
共通の裂開用ミシン目によって相接し、これに連なる非共通の裂開用ミシン目を有し、基端に形成された底面長辺に平行で相互に平行な起立折目線部分を残して、それぞれ裂開可能でかつ相対向して切り起こし可能な２個の屈折片を箱の底部に形成した収納箱において、
前記共通の裂開用ミシン目は、前記起立折目線内側端にそれぞれ端を発し、それぞれ相手側の屈折片の方向に張り出す上側係止片と、それぞれ前記上側係止片と同じ方向に張り出す下側係止片と、が形成されるように構成することにより、前記上側係止片と前記下側係止片とによって各屈折片側に食い込む係止部が形成されるように構成し、
前記両屈折片を起立させたときに、前記各係止部がそれぞれ相手側の係止部に食い込み前記各係止部の最奥部が相互に接触して係止されるように構成し、
前記両係止部の最奥部相互を繋ぐ仮想線と前記起立折目線との交差角度が、９２°～１２０°である、ことを特徴とするティシュペーパー収納箱。
【発明の詳細な説明】
【０００１】
【産業上の利用分野】
本発明は、ティシュペーパー収納箱に関し、さらに詳細には、底部に切り起し可能な屈折片が形成されたティシュペーパー収納箱に関する。
【０００２】

【従来の技術】
一般に、ティシュペーパー収納箱は、折り畳み状態で重畳されたティシュペーパーを収容しており、使用に際して１枚ずつ連続的に取り出せるようなっているが、使用に伴って収納箱中のティシュペーパーの残量が少なくなると、取り出し口からティシュペーパーが連続的に出てこなくなることがある。そこで、ティシュペーパー収納箱の底部に切り起し可能な屈折片を形成しておき、ティシュペーパーの残量が少なくなった時に屈折片を収納箱内部に向けて切り起してティシュペーパーを持ち上げるようにしたティシュペーパー収納箱が広く使用されている。
【０００３】
しかしこの種のティシュペーパー収納箱では、屈折片を切り起こした後、残存しているティシュペーパーの重量等の影響を受けて、切り起こされた屈折片が倒壊してしまうことがあった。かかる倒壊が起こらないように、たとえば実公平２－42621 号公報においては、屈折片の形状に工夫を凝らし、２つの屈折片を形成し、これらの屈折片が互いに支え合うようにされたティシュペーパー収納箱が開示されている。
【０００４】
このティシュペーパー収納箱の底部に形成されている屈折片は、図８に示すように、互いに平行な折目線５０Ａ，５０Ｂと、各折目線５０Ａ，５０Ｂの外側端５１Ａ，５１Ｂと他方の折目線５０Ｂ，５０Ａの内側端５２Ｂ，５２Ａとを連結する外側の裂開用ミシン目５３Ａ，５３Ｂと、折目線内側端５２Ａ，５２Ｂ間を連結する中央の裂開用ミシン目５４とにより隣接形成されている。この中央の裂開用ミシン目５４は、折目線内側端５２Ａ，５２Ｂからそれぞれ相手側の屈折片の方向に張り出して、点対称の定点５５と各折目線５０Ａ，５０Ｂの内側端５２Ａ，５２Ｂを通過する仮想垂線Ｌ’との交点である２基点５６Ａ，５６Ｂとそれぞれ連結して張出部６１Ａ，６１Ｂを形成する弧状部５７Ａ，５７Ｂと、両基点５６Ａ，５６Ｂ間を波状に１サイクルで連結して張出部６１Ａ，６１Ｂと同じ張出方向に張出部６２Ａ，６２Ｂを形成する、逆Ｓ字またはＳ字状部５８とによって構成されている。そして、屈折片６０Ａ，６０Ｂを切り起した後は、各基点５６Ａ，５６Ｂで両屈折片６０Ａ，６０Ｂ同士を互いに係止し、支え合うようにされている。
【０００５】
【発明が解決しようとする課題】
しかし、上記公報に開示されているティシュペーパー収納箱において、底部に形成されている屈折片は、折目線内側端同士を結ぶ仮想線が両折目線に対して垂直とされているので、使用時において、係止点では、鉛直方向に対してのみ両屈折片が支えあっているにすぎないものであった。
【０００６】
このため、両屈折片の係止力はさほど大きくなく、残存しているティシュペーパーの重量の影響等を受けて倒壊してしまうことが考えられる。特に、折目線に沿った方向には何ら力関係が作用していないため、両屈折片の外側方向に力が掛かった場合、たとえばティシュペーパー収納箱の底面が鉛直上側方向に向け、折目方向に沿って撓んだ場合には、係止されている両屈折片が容易に外れてしまうものであった。
【０００７】
そこで、本発明の課題は、切り起し可能とされた一対の屈折片が底部に形成され、ティシュペーパー残り量が少なくなった場合でもティシュペーパーを容易に取り出せるようにしたティシュペーパー収納箱において、切り起し時に係止状態とされた両屈折片の係止力が大きく、両屈折片の係止関係が容易に崩壊することのないティシュペーパー収納箱を提供することにある。
【０００８】
【課題を解決するための手段】
上記課題を解決するため、本発明は、共通の裂開用ミシン目によって相接し、これに連なる非共通の裂開用ミシン目を有し、基端に形成された底面長辺に平行で相互に平行な起立折目線部分を残して、それぞれ裂開可能でかつ相対向して切り起こし可能な２個の屈折片

を箱の底部に形成した収納箱において、
前記共通の裂開用ミシン目は、前記起立折目線内側端にそれぞれ端を発し、それぞれ相手側の屈折片の方向に張り出す上側係止片と、それぞれ前記上側係止片と同じ方向に張り出す下側係止片と、が形成されるように構成することにより、前記上側係止片と前記下側係止片とによって各屈折片側に食い込む係止部が形成されるように構成し、
前記両屈折片を起立させたときに、前記各係止部がそれぞれ相手側の係止部に食い込み前記各係止部の最奥部が相互に接触して係止されるように構成し、
前記両係止部の最奥部相互を繋ぐ仮想線と前記起立折目線との交差角度が、９２°～１２０°である、ことを特徴とするものである。
【０００９】
【作用】
本発明に係るティシュペーパー収納箱においては、実質的な係止関係を形成する係止点を繋ぐ線と、起立折目線との交差角度が鈍角とされている。このため、屈折片を切り起こして使用する時、互いに係止し合う屈折片同士が、双方で折目方向に沿って押し合う形となる。したがって、折目方向に沿った外側の方向に力がかかった場合、たとえばティシュペーパー収容箱の底部が鉛直上側方向に撓んだ場合であっても、屈折片同士の係止関係は崩壊し難い。
【００１０】
【実施例】
以下、本発明を実施例を参照しながら、具体的に説明する。
図１は、本発明に係るティシュペーパー収納箱の底面図である。ティシュペーパー収納箱１０の底面２０には、外側ミシン目３０Ａ，３０Ｂ、中央ミシン目３１、および相互に平行な２本の起立折目３２Ａ，３２Ｂによって切り起し可能な屈折片４０Ａ，４０Ｂが形成されている。なお、屈折片４０Ａ，４０Ｂの形成される位置は、ティシュペーパー収納箱底部２０の中央部であって、収納箱上部に設けたティシュペーパー取出口１１に対向する位置（図４参照）が望ましい。
【００１１】
この屈折片４０Ａ，４０Ｂの拡大図を図２に示す。外側ミシン目３０Ａ，３０Ｂは、それぞれ折目線３２Ａ，３２Ｂの外側端３３Ａ，３３Ｂと、相手側の折目線３２Ｂ，３２Ａの内側端３３Ｄ，３３Ｃとを繋いで形成されている。
【００１２】
中央ミシン目３１は、折目線内側端３３Ｄ，３３Ｃにそれぞれ端を発し、屈折片４０Ａ，４０Ｂに、それぞれ相手側の屈折片の方向に張り出す上側係止片４１Ａ，４１Ｂを形成するように、係止点３４Ａ，３４Ｂまで延在する上側張出部３１Ａ，３１Ｂと、屈折片４０Ａ，４０Ｂにそれぞれ上側張出部３１Ａ，３１Ｂと同じ方向に張り出す下側係止片４２Ａ，４２Ｂを形成するように、係止点３４Ａ，３４Ｂと、対称点３５とを繋いでなる下側張出部３１Ｃ（Ｓ字、逆Ｓ字部に相当する。）とによって構成されている。また、上側係止片４１、下側係止片４２によって係止部が構成されており、屈折片４０Ａ，４０Ｂを起立させたときに、この係止部が相手の屈折片４０Ｂ，４０Ａに食い込む。係止点３４は係止部の最奥部にあたる。
【００１３】
この中央ミシン目３１は、切り起こして使用する際に係止される関係上、対称点３５を対称点とした点対称形状とされている。そして、係止点３４Ａ，３４Ｂを結んだ仮想線Ｌと折目線３２Ａ，３２Ｂとが形成する角度θは９５°とされている。
【００１４】
切り起こして使用される屈折片４０Ａ，４０Ｂは、図３および図４に示すように、係止点３４でそれぞれが接触して係止されるが、仮想線Ｌが傾斜を有しているため、係止されている屈折片４０Ａ，４０Ｂには、矢印で示す方向と反対方向に若干の撓みを生じる。撓んでいる屈折片４０Ａ，４０Ｂには復元力が発生し、その復元力によって上側係止片４１Ａ，４１Ｂがそれぞれ矢印で示す方向に付勢され、屈折片４０Ａ，４０Ｂは係止点３４にお

いて強固に係止される。したがって、たとえば底面２０がティシュペーパー収納箱１０の内面方向に向けて撓んだ場合でも、切り起こされた屈折片４０Ａ，４０Ｂの係止関係が崩れることはほとんどなくなる。

【００１５】

また、図５に示すように、この種のティシュペーパー収納箱１０における屈折片４０Ａ，４０Ｂは、通常、親指等によって裂開されるが、このとき、折目線３２Ａ，３２Ｂが底面２０の胴部２１Ａ，２１Ｂと平行とされていると、屈折片４０Ａ，４０Ｂの裂開が容易となる。

【００１６】

なお、本発明は、ここで示した実施例以外であっても、両屈折片に係止部が形成され、各係止部の最奥部相互を繋ぐ線と起立折目線との交差角度が鈍角となる態様であればよい。したがって、たとえば図６に示すように、切込み部分を除いて、中央線が同一直線上に存在するようにしてもよい。また、図７に示すように、各折目線が裂開用ミシン目と繋がれていない態様とすることもできる。

【００１７】

また、係止点３４Ａ，３４Ｂを結んだ仮想線Ｌと折目線３２Ａ，３２Ｂとが形成する角度θが大きすぎると、Ｓ字部、逆Ｓ字部が引っ掛かり、ゆがみが大きくなることで指で押し成形することが困難となる。この点に鑑み、本発明者等が実験を行った結果、角度θは、屈折片の大きさや材質等にも影響されるが、９２°～１２０°の範囲に設定するのが望ましく、その範囲内で最も好ましい角度が９５°であることも判明した。

【００１８】

【発明の効果】

以上の説明から明らかなとおり、本発明によれば、切り起し時に係止状態とされている両屈折片の係止力が大きくなり、もって両屈折片の係止関係が容易に崩壊することのないティシュペーパー収納箱を提供することが可能となる。

【図面の簡単な説明】

【図１】本発明に係るティシュペーパー収納箱の底面図である。

【図２】その要部拡大図である。

【図３】係止されている屈折片の側面図である。

【図４】屈折片を切り起させた際のティシュペーパー収納箱の一部切欠斜視図である。

【図５】屈折片を係止させる状態を示す斜視図である。

【図６】本発明に係るティシュペーパー収納箱の他の態様の底面要部拡大図である。

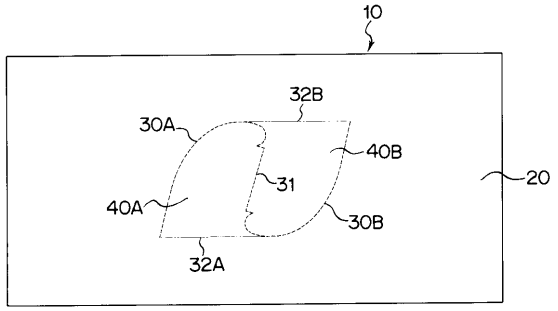
【図７】さらにその他の態様の底面要部拡大図である。

【図８】従来のティシュペーパー収納箱の底面図である。

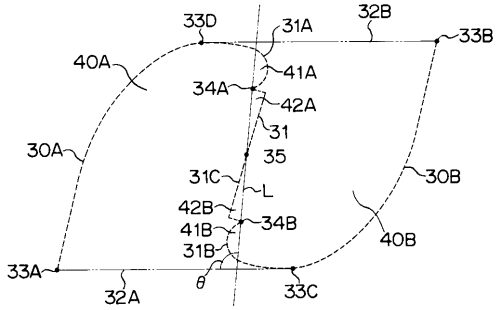
【符号の説明】

１０…ティシュペーパー収納箱、１１…ティシュペーパー取出口、２０…収納箱底部、３０…外側ミシン目、３１…中央ミシン目、３２…折目線、３３…折目線端部、３４…係止点、３５…対称点、４０…屈折片、４１…上側係止片、４２…下側係止片。

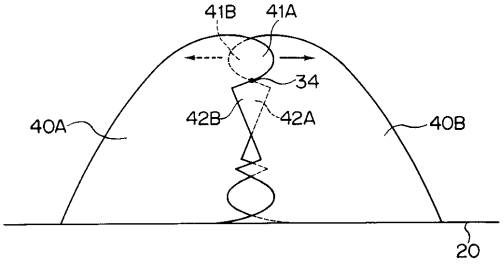
【図１】



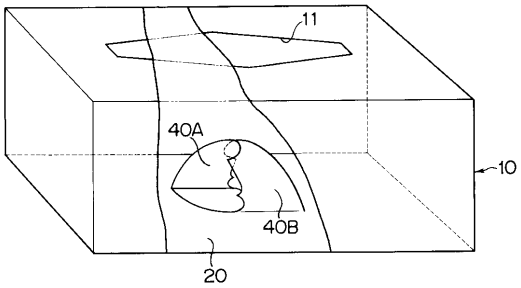
【図２】



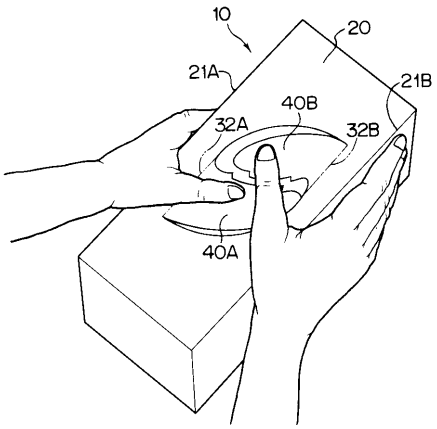
【図３】



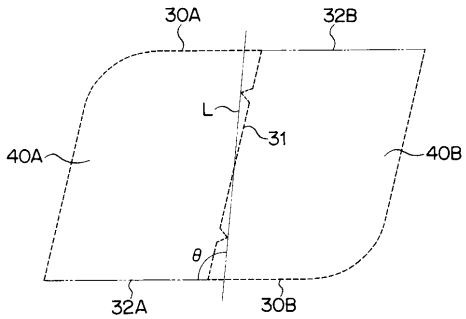
【図４】



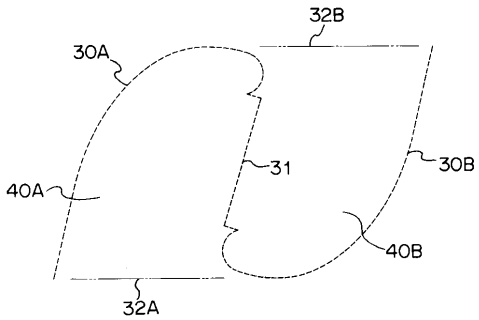
【図５】



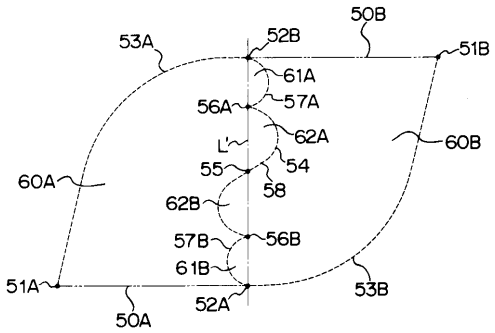
【図６】



【図７】



【図８】


50B
53A
52B
51B
61A
56A
57A
62A
60B
L'
55
54
60A
58
62B
57B
56B
61B
51A
53B
52A
50A

フロントページの続き

(56)参考文献 実公平０２－０４２６２１（ＪＰ，Ｙ２）
実開昭６０－０６８０７５（ＪＰ，Ｕ）
実開昭５６－０６２９８１（ＪＰ，Ｕ）
実開昭５６－１１３６７７（ＪＰ，Ｕ）
実開昭５８－１９４１７８（ＪＰ，Ｕ）
実公昭５７－５７０２６（ＪＰ，Ｙ２）

(58)調査した分野(Int.Cl.，ＤＢ名)
B65D83/08